ウインゾル一日の逍遙

内務省參事官　佐上信一

一

倫敦の霧深い正月の初めに、のんびりした一日を英國の田舍に遊び暮して見たいといふ一念から、同宿の日氏を誘ひ出してウインゾル町に向ふべく、バデンドン停車場に駈け付けたのは彼是午前の十一時であつた。沿道は冬の最中なるに、英國特有の綠芝は萠ゆるが如く、何となく初春の思ひがする。ウインゾルに到着したのは午後零時過であつた。此の地には名高い王城もあるが、今日は田園の氣分に浸るのが主要の目的だと云ふので、その見物をも省略して、王城の横手のレストランで晝食を認めた。美味しいビーフステーキに、酸味のある白いソースをかけたのが、甚だしく同行の日氏を喜ばせた。

二

食後馬車を賃して城外のロングウォークを逍遙した。ロングウォークは、ウインゾル大公園の中を走る立派な直線道路であつて、三哩の間兩側に栗の並樹が植栽されて居る。栗の花の薫る五月の頃は嘸や此の地を訪ふものの詩腸をそそることであらう。此の公園には數多の鹿や馴鹿が放養されて居るので、之を驚かすやうな自動車や自轉車の通行は許して居らぬ。自分等が何も知らずに馬車を選んだのは洵に偶然の幸福であつた。ロングウォークの盡る所には小高い丘があつて、其の上に建てられたジョーヂ三世の馬上の像は風雨多年、綠青の色の掬すべきものがある。ビクトリヤ女皇の皇婿たるアルバート親王の墓は、此の丘から指顧の間にある。大公園の各所には貴顯の手植された杉や松が昔ながらの翠綠を湛えて居た。

三

ウインゾール大公園を出でて、其の附近の入會地に遊べば、數多の野兎が叢間に跳り栗鼠が樹枝に戯れて居るのを見た。人が之を害せぬが爲めか、自分等が其の側を通行しても恐れもしなければ遁げも隱れもせぬ。大公園の外廓を走る遊歩道路を行くこと六哩餘にしてバーヂニヤ湖に達する。其の南端か急轉直下してバーヂニヤの瀧となる。此の地塵環を遠かりて靜寂無比、悠々ベンチに倚りて讀書に餘念なき二三の行客を見た。附近の農家は所謂カッテーヂの作りにて野趣横溢極めて環境に適合するものあるを覺ゆる。田舍ホテルには「完全なる厩あり」と書かれてある招牌がかかつて居る。昔自動車の發達せざりしターンパイクロード時代に英國内を旅行するものは、乘馬か乘車であつたが爲、厩はホテルに附きものであつた。

四

ウインゾルのホテルの厩の招牌は、過ぎし時代の色を示すと共に、此の地方には到る處に數年前から自動車の修繕工作所とガソリン販賣所とを兼ねたアウトギヤラヂーが設けられてある。之は英國の道路の改良に伴つた當然の副產物である。卽ち自動車の普及發達は益々道路の改良を促し、道路改良熱の勃興は益々自動車に對する是等補助的施設の普及發達を促すからである。蓋し自動車を以て長距離輸送の目的に使用せむとせば、勢ひ自動車の小修繕工作所を伴ふガソリンの供給所を道路の適當の距離毎に設けなければならぬことは固より當然のことである。

五

ウインゾルの町は、何となく野趣に富むだ所である。町内には何等都會的な氣分がない。活動寫眞館では、今夜ザ、ミカドと稱する日本ものが封切されるので、見て行かぬかと勸誘する町の人の厚意を謝しながら、夕風の寒さを厭ふて先刻のレストランで熱い紅茶に腹を溫めて、午後四時過ぎウインゾル停車場を出發して倫敦に向つた、夕刻バテントンの停車場に到着すれば滿街の燈火は垂れ罩めた厚い霧に仄暗くまたたいて居つた。(一九二〇、一、九)